第１話

「ピンポーン」

「はーい。どなた」

チャイムの音に裕子は、ドアのインターホンに向かって話しかけた。

「宅[illegible]便です」

若い女の声だったので警戒心もなくドアを開けた。するとその瞬間、複数の女達が入り込んできた。

「なに、あなた達」

裕子は喋る間もなく四人の女達に押し倒された。

「恵美、あんたはこの女が逃げないように玄関にカギをかけてそこに立っていなさい」

「ちょっと、何なのよ！警察呼ぶわよ！」

恵理子と静香が抵抗する裕子を押さえつけていた。利香はカバンの中からクロロホルムを取出すとハンカチに染み込ませ、裕子の口に押し付けた。

「やめっ！ウゥ〜〜」

激しく動かしていた手足の力は徐々に弱まり、数秒後には意識を失っていた。

「OK よ。第一段階の計画終了ね」

「案外うまくいったわね。こんなにクロロホルムが効くなんて」

「安心してる場合じゃないわ。早く予定通り進めましょ」

4 人は意識を失っている裕子の衣類を脱がせ、下着の姿にした。

「なかなかいい体してるじゃない。この体で私達の彼氏を寝取ったのね」

恵理子は少し興奮気味で話し出した。

「まあまあ、復讐はあとでたっぷりやるとして、まずは計画通り進めないと」

そう言って静香がポラロイドカメラを持って下着姿の裕子を数枚写した。

「恵美、利香お願い」

「は〜い」

二人は服を脱ぎ、裸の状態で裕子と絡み合うポーズをとった。続いて静香が写真のシャッターを押す。

「すごい姿ね。写真だけ見るとおもいっきりレズプレイね」

「もういいわ。次はパンティーを膝まで脱がして。マンコの割れ目を開いてちょうだい」

二人の女によって、裕子の割れ目がもろに露出した。そこに容赦なくカメラのシャッター音が響く。

「こんな写真取られたら、もう私達のいいなり決定ね」

「まだよ。この淫乱女があとから写真を見て、顔から火がでる程、猥褻な写真を取らないとね」

「さあて、今度はお尻の穴ね。裕子をうつ伏せにして」

恵美と利香は裕子をうつ伏せにし、現れた尻の割れ目を両手で左右片方ずつ掴んだ。

「恵理子、裕子の顔をこっち向けて。あ、そうそれ位。よし準備OKよ」

合図と共に尻の割れ目は開かれ、肛門が丸見え状態となった。

その部分に向けてシャッターは押される。

「きれいなお尻の穴ね。今日はここでいままでの恨みを晴らさしてもらうわよ」

第２話

裕子のアパートでは、陵辱の写真撮影が行われていた。服を脱がされ下着姿にされ、膣の割れ目から肛門まで写されてしまった。

しかしこれは復讐の序章にすぎず、目的は脅しのためであり、本当の陵辱はまだ始まったばかりだ。

「カシャ、カシャ」

恵美と利香によって開かれた尻の割れ目、肛門に向かってフラッシュが容赦なく光っていた。二人で左右に開かれ
ている為、肛門は必要以上開かれてしまった。

「すごいわね。私他人の肛門って見たの初めてよ」

「私もよ。自分のもあんまり見たことないのに」

「もうこれだけ撮れば充分でしょう。レズの写真もあるし、言い訳できないわよ。」

「まってよ。今面白い事考えたわ。最後にすごい写真を撮ってやりましょう」

恵理子は裕子を四つん這いにし、尻を持ち上げた。気を失っているせいで太股の内側と足の踵が密着し、尻の割れ目はモロに開いた。さらに陰部の性器と肛門が現れた。

「すごいポーズね。女の私がみても恥ずかしいわよ」

「フフフ、まだこれからよ。こうやって」

恵理子は裕子の右手を掴むと、指を全部握らせコブシを作たかと思うと、人差し指だけをまっすぐに伸ばしそのまま性器の膣に差し込んだ。

「どう、オナニー写真よ。はやく撮って」

「そんなことまで！すごいわね。なんか私まで興奮してきたわ」

そして恵理子の陵辱はさらに続いた。性器に入った指を抜いたかと思うと、今度は肛門に差し込もうとしていた。四人の中でも一番恨みを持っていた。そのため次々と残酷な行為を考えつき、写真に収めた。

「なかなか入らないわね。利香、お尻の穴を開いてちょうだい。起こさないようにね」

利香は親指と人差し指、二本の指で肛門をゆっくりひろげ、そこの中心の穴に向かって裕子の人差し指を少しずつ押し込んでいった。

気を失った女の指を無理矢理肛門に差し込む行為は、同姓でも興奮する程の猥褻な光景だった。そのなかでも、実行役の恵理子が一番興奮していた。

「ハア・・・ハア。入った、入った。なんか面白いわね。見てよ、第2関節まで入れてやったわ」

「これってアナルオナニーよね。見て、目つぶっているから本当に感じているみたい。はやく写真を撮りましょ」

シャッターを押しながら静子が興奮気味に喋りだす。

「いい気味ね。あのごうまんでいつも人を見下していた女が、いまじゃ裸にされてこんな写真まで撮られて。もう私は気が済んだ位よ」

「なに言ってるの。目を覚ましてからが本番よ。この写真を見せ付けて脅してもっと恥ずかしい事するんだから」

「その為に友達のSM嬢に相談したわ。どんな方法が一番陵辱出来るかね。道具もいろいろ借りてきたし」

「ねえ、私はどんな事やるかあんまり知らないから聞かせてよ。道具ってなによ」

利香は興奮しながら恵理子に聞いた。

「今日はあんまり時間かけないわ。とりあえず裕子が目を覚ましたあとは最低、マンコの毛を全部剃ってそのあと浣腸してやるわ。」

「・・・か、浣腸て・・・あの」

「そうよ。多分泣き叫ぶわよ。四人で押さえつけて無理矢理お尻の穴にブチューってね」

「すごい。なんか楽しみね」

その時、意識を失っていた裕子の瞳が僅かに開きだした。

第３話

「う・・・いったいなにが」

意識が戻った裕子は呆然としていた。まず目に入ってきたのは明らかに満面の笑みを浮かべて勝ち誇った様子の女だった。そのあとすぐに３人の女の姿も目に入った。

そして自分の状態に気付きなんとなくではあるが自分の身に何が起きたか想像できた。やっとのことで声が出た。

「な、なんで私下着なの。な・・・なによあんた達」

徐々に記憶が蘇り始めていた。周りにいた複数の同性。宅配便が来て、ドアを開けたら４人の女達に押さえ付けられたこと。

「ようやくお目覚めね。」

いままでポラロイドで撮った写真を見ながら恵理子が話かけてきた。

「どうしてこんなこと。なにが目的よ。こんなことしてタダですむと思っているの？警察呼ぶわよっ！」

時間が経つにつれ、怒りがこみあげてきた。この女達に薬で気絶させられ、服を脱がされた事を認識していた。
そんな必死の裕子に今回の陵辱計画の主催である恵理子が話しだした。

「どうしてかって、フフフ。じゃあまず目的からね。あなたいままで他人の彼氏を平気で奪ってヤリまくっていたわよね。知らないなんて言わせないわよ。彼氏を寝取られた女達の復讐ってとこかしら。分かった？」

「そんな・・。逆恨みじゃない。あんた達に魅力がなかっただけじゃない。あたしのせいじゃないわ。それよりこんな事して覚悟は出来てるんでしょうね」

裕子はスキをみせまいと必死に強がってみせたが、それが逆効果につながるとは、今は知るすべもなかった。

「覚悟・・・強気ね。でもこれを見てもそんな態度続けられるかしら」

そう言っていままで撮った写真を見せつけた。裕子は、最初なんの写真か分からなかった。しかしそこに写っているのが自分だと分かると真っ青な顔をして奮いだした。

「そ、そんな。まさか私が気絶してるうちに」

最初に目にしたのは２人の女と絡み合うレズ写真だった。

「もっといろいろあるわよ。ほら、これなんかあなたの割れ目を全開に開いているわよ。綺麗なピンク色ね。さらに二人の同性に片方ずつ割れ目を開かれているのもあるのよ」

「・・・い、いやーーーー」

自分の性器を写真でみた裕子は激しい羞恥心と屈辱感にまみれて叫びだした。

「まだ、まだ。さらにもっと恥ずかしいところの写真もあるわ。これ・・お尻の穴よ。つまり肛門よ。こ・う・も・ん。いっぱいシワがあるわね。こんなところ自分でもあんまり見たことないでしょ。どう？」

まわりの女達もニヤニヤ笑いを浮かべていた。

「お尻の穴・・気絶してるうちに。こんな、こんなことって。ヒドイ。ひどすぎるわ」

溢れる涙を必死にこらえていたが、ここで泣いてしまえば負けだと思い強気で身構えるようにしていた。

「さらにこれ、とっておきの２枚の写真よ」

その写真を見た瞬間、裕子の顔は真っ赤に染まり両手で顔を塞ぎ震えていた。

「すごいでしょう。恵理子が考えたのよ」

それは四つん這いで性器に指を差し込んでいる写真だった。

「恥ずかしいわよね。でももっと恥ずかしいのがもう一枚あるのよ」

周りの女達はついにアナルオナニーの写真を見せるのだと思い、興奮していた。無意識のうちに、自分の指を肛門に入れられたことを知った時の裕子の反応に興味を持っていた。

だが、恵理子は単純に写真を見せるだけでは満足できず言葉による陵辱も考えていた。

「裕子、両手で顔ふさいでいるけど右手の人差し指クサクない。よく臭ってみなさいよ。」

「・・・・・」

恵理子の言葉の意味が理解出来なかったが、両手を顔にあてた瞬間から僅かな悪臭がしていたのは確かだった。

「そうね。例えるならウンコの臭いじゃない。」

「ブ、アハハハハ。自分でやっといて。恵理子ったら。」

最初裕子は、女達がなにを言っているのか理解できなかった。確かに便の臭いはしていて違和感を覚えてはいたが、それどころではなかった。

慌てて自分の人差し指を確認してみると、爪先に少し茶色い物が付着していた。

「な、なによこれ。なにしたのよ」

まったく気付かない裕子だったが、恵理子が写真を見せた瞬間、すべてを理解した。激しい屈辱感、と共に怒りがこみあげてきた。

「よく撮れているでしょう、肛門にブッスリ。変態女のアナルオナニー。分かった？それあなたのウンコよ。そりゃ臭うわね。さっきまで肛門に入っていた指だからね。」

「ヤダー、顔を塞いだときウンコが付いたんじゃないの。」

4人の女達は一斉に笑い出した。その反応に裕子の激しい怒りが爆発し、写真を持った恵理子に襲いかかった。

「パシ」

右手で力一杯、ホホにビンタをくらわした。周りの全員は予想だにしなかった行動に動揺した。

「ふざけんじゃないわよ、この卑怯もの。気絶させて好き放題の事をして。写真を返しなさいよ」

狂ったように反抗する裕子を3人で必死に押さえつけた。恵理子はいきなりのビンタに動揺したが、すぐに平静を取り戻した。

ビンタによる痛みが少し残っていたが、怒りはなかった。それよりこの強気な女を今から屈服し蹂躙する事が出来る事に喜びを感じていた。

第４話

「痛いわね。よくもやってくれたわね」

叩かれたホホをさすりながら恵理子は、他の三人に押さえ付けられようやく大人しくなった裕子に近づいていき、不気味な笑みを浮かべ喋りだした。

「いきなりビンタがくるとは思わなかったわ。でも叩くのなら左手でしてほしかったわね。ついさっきまで肛門に入っていた手で叩かれたんじゃ、たまったもんじゃないわ」

再び肛門の事を言われた裕子は、湧き上がってくるさまざまな感情に身を任せ強気な態度で言い返した。

「あんた達、許さないからね。覚えてなさい。あとで絶対後悔させてやるわ」

「後悔だって。フフフ、裕子さん。なんの為に私達がこんな写真撮ったと思ってるの。あなたの弱みを握るためよ」

「そうよ、あなたの態度しだいではこの写真、身近な人に全部ばらまいてやるわ。友達、会社の同僚から上司、あと関係がある男にもね。」

「な・・・そ、そんな」
戸惑いを見せた裕子に、どんどん卑劣な脅しがかかる。

「私達、あなたの人間関係、調べさせてもらったわ。特に親しい人は住所までね。それと会社ではなかなか

やり手みたいね。職場はほとんどが女だから、こんな写真がばれた日にはもう終わりね」

「そうだ、会社のほうにはアナルオナニー写真を送ってやりましょうよ。キャリヤウーマンの実態は肛門でオナニーする変態女。ウワァァ～最悪」

「や、やめて。そんなこと、お願いよ」

必死になって頼み込む裕子の態度は、さっきまでの強気も消えていた。そんな彼女の言葉が耳に入るわけもなく、女達の脅しの暴走は止まらない。

「ここのアパートの住人にも送りつけましょうよ。そしたら住めなくなるわね。」

「あとさ、素人投稿のホームページや写真集にも送ろうよ。」

「・・・・」

言葉を失う程の卑劣さだった。この女達には逆らえないと理解した裕子は震えながら口を開いた。

「どうすればいいのよ。あなた達の彼氏と別れればいいの？」

「裕子さん、いまさらそんな事して頂かなくて結構よ。もう男はどうでもいいの。私達はあなたに人生の一部を滅茶苦茶にされたんだから、あなたにもその苦しみを味わってもらいたいの」

「どうすればいいのよ」

「つまり償いよ。あなたに今から最高の屈辱を味あわせてやるわ。いい私達の命令には逆らわないでね。いや、逆らえないわよね。あんな写真があるんだから。まぁ逆らってもいいけど」

「償い、屈辱って。あんな写真撮れば充分でしょ。もういいじゃない」

「あの程度で済む訳ないじゃない。もっと恥ずかしくて、とても人には相談出来ない程イヤラシイ事するからね」

「な・・・あの程って。そんな、一体どんな事を。いやよこんなゲスな女達に・・・」

大声で叫び助けを求めたかっが、写真の脅しが本気であると認識した裕子は無意識のうちに従うしかないと思い唇をかみしめていた。。

第５話

「お、お願いよ。他の方法で償うわ。そうだわ。お金で・・・」

裕子は同性に、しかも複数に辱しめを受けると知り、恐怖と羞恥心で脅えていた。

裕子は27歳で既婚であり、大手企業に勤務している。容姿端麗で、それを利用し、いままで複数の異性と関係を持っている。中には彼女に貢ぐ男も数名いる為、かなり贅沢な暮らしをしていた。

セックスをしたいという訳でもお金が欲しいという訳ではなく、「ただ他人の彼氏を奪う為」というエッチに快感を覚えるようになってしまった。

男とならいくらでも寝ることができた。しかし同性は吐き気がするほど抵抗感があった。

「お金ですって、さんざんな事をしといて。いいわ、今の世の中そんなに甘くないってことも思い知らせてやるから覚悟しなさい」

必死の発言さえも逆効果だった。

「さ〜て、まずなにしようかな」

「ねえ、まだ本人から謝りの言葉は聞いてないわよ。とりあえず謝罪を聞きたいわね」

「そうそう、誠意を込めてね」

当然、ただ謝って済ませるはずはなく、女達の残酷な仕打ちも同時に進めようとしていた。

「裕子さん、まず私達の前に立ってちょうだい」

絶望の表情で俯いている裕子も、彼女達の妖計に薄々気付いていた。謝って済ます訳はなく、また屈辱を与えられると思うと、たまらなかった。

「ぐずぐずしないの。早く」

同じ女に命令されるハガユイ気持ちを押さえながら、4人の前に立った。

「さあ、始めなさい」

裕子は少し間をあけ、ゆっくりと喋りだした。

「いままで酷い事してごめんなさい。これからは二度と関係をもたないから許して下さい」

「それだけ？全然駄目ね。言葉じゃなんとでもいえるわ。態度で表してちょうだいよ」

「・・・ど、どうしたら」

「そうね。まず下着のブラを取ってオッパイ出してよ。今まで男を挑発してきたところを全部見せてもらうわ」

「全部、ぜ、全部って・・そんな」

「はやく、写真のこと忘れたの」

写真の恐怖を思い出した裕子は、仕方なくブラジャーを外した。

「へエー、いい形じゃん。ちょっと自分でもんでみてよ」

「自分で、自分でなんて」

「利香、カメラ用意してよ。また面白い写真が撮れそうよ」

「・・写真、まだ写真を。そんな、お願いもう写真はやめて」

「なに反抗してるの。しかもさっきからトロイはね。さっさとしないと写真バラまくわよ。今からこのアパートの住人のポストに入れてきましょうか」

「・・・・わ、分かったわ」

形のいい胸、モデルのようなスタイル、そんな女が自分の胸を揉む光景はなんともエロティックな眺めだった。

「いいわね、今度は乳首を指で掴んで」

カメラのシャッターを押しながら命令する利香だった。抵抗しても無駄だと

分かった裕子は脅えながら二本の指で乳首を触っていた。

「なんかすごくイヤラシイわね。撮ってる私が興奮してくる位よ。さすがに男をたぶらかすだけあって美しいわね」

「写真なんて、なんでこんな・・・く、悔しい」

唇を噛み締めながら必死に耐える彼女に、さらに羞恥の要求が続く。

「今度はさ、パンティーを横にずらして陰毛を見せなさいよ」

予想していた言葉だったが、素直に出来る行為ではなかった。そんな

裕子に恵理子はシビレを切らし、カバンからSM用のムチを取り出した。

「あんたね、さっきからなによ。いいかげんにしなさい。いちいち考えて

間を開けないでちょうだい」

異様なムチを見て激しく脅える裕子に容赦なくムチは振り下ろされた。

「や、やめてよ」

パンティーの上からお尻を叩かれてしまった。SM用で痛みはそんなにしない

物だか、グロテクスな形に恐怖を感じていた。

「やめてじゃないでしょう、お仕置きよ。後ろ向いてパンティー半分脱いで

前かがみになって、お尻出しなさい」

「お尻、生のお尻た叩くの・・でも言う事聞かないと今度はなにされるか・・」

恐怖感が意思とは関係なく行動に移させていた。半ケツの状態の裕子に恵理子はムチを捨て近づいた。

背後から片手は腹部の下に通し右腕全体で掴み、左手で丸出しになった尻を叩きだした。

「い、いやーー。やめてお願い。も、もう逆らわないから。お願いよ」

尻を叩かれる痛みより、27 にもなって子供のようにお尻を叩かれている行為に

激しい羞恥心を感じていた。しかもその光景を写真に撮られている状態にも気付き、より一層、屈辱感があふてれいた。

「どう、恥ずかしいでしょう。もっともっと恥ずかしい事されかくなかったら素直に聞く事ね。」

「・・・・こ、こんな事って。悪夢だわ。同じ女に、同じ女なのに。まだ男にされた方がマシだわ」

第６話

「これで分かったでしょう。恥ずかしいめに合いたくなかったら抵抗しないことね。フフフ・・それにしても綺麗で大きなお尻ね」

裕子の尻を触りながら、時にはその尻肉を手全体で掴み、感覚を楽しんでいた。

「さあ、早く利香の要求どおりにしなさい。利香、陰毛だったわね。パンティーはどうするの」

「パンティーは、脱がないで。横にずらして陰毛見たほうがイヤラシイもの」

「聞こえたでしょう。さっさと言われた通りにしなさい」

恵理子はそう言って最後に裕子の尻を叩いた。その後、裕子は観念し要求通りの行動に移っていた。

「いいわね～。すごくイヤラシイわよ。結構、毛が濃いじゃない。もっとパンティーをずらしてよ」

「ねえ、私も要求していい」

さっきからこの異常な光景に興奮していた恵美が喋りだした。

「裕子さん、その状態で陰毛を１本抜いてみてよ」

「プ、アハハハ、それいい」

「・・・そんな。でもやらないと・・・」

溢れる涙を押さえながら、従うしかなかった。裕子はこの女達に決して泣く姿だけは見せまいと決意していた。

それが唯一出来る反抗だと思っていたからだ。

右手でパンティーを横にずらし、左指で陰毛を１本掴み抜こうとする姿に４人の女達は大声で笑っていた。

「抜けたみたいね。よく出来ました。その毛をカメラに向けてよ」

「そんなに俯いてないで、もっと顔を上げてよ。そうよ。はいチーズ」

耐えがたい行動に、目を閉じ堪えるしかなかった。

じゃ、次はパンティーを膝まで下ろしてそこに座ってちょうだい」

「そうよ、そうやって素直な態度で応じてね。その状態で足を開いて」

「う、見られる。・・・うう」

体育座りの状態で足を開いた裕子に利香のシャッター音が響く。

「恥ずかしそうね、でもまだまだいくわよ。自分の両手でオマンコの割れ目をひろげなさい」

「・・・・そ、そこまで。自分で自分でなんて、そんな姿、写真に撮られたら」

「あれ、またトロクなったわね。恵理子、もう少しお尻を引っ叩いてやったら」

「ヒ・・・や、やるからもうあんな事やめて」

両手で自分の割れ目を少しづつ開いていく裕子を、女達は興奮すると同時に

憎かった女をほとんど制圧した感覚に酔っていた。

「いい気味ね～。しかし女にこんな事されたら、私だったら耐えられないわね。ま、あなたはそれなりの事したから自業自得ってとこかしら。」

「ほら、もっと開いてよ。そう、そう、いいわね～、綺麗なピンク色だこと」

「そのままカメラに向かってベロを出してよ。挑発するようにさぁ」

「いいわよ、なんか私エロ本写真のカメラマンになったようね。次はさあ・・」

「どんどん非道ことを、これ以上なにを・・・」

終わることのない女達の仕打ちに、不安を感じていた。

「そうだ、その開いた性器に指を入れてみてよ。オナニーしている時みたいにやってちょうだいよ。」

「じょ、冗談じゃないわ。いい加減に・・・」

一瞬、抵抗の感情が湧きあがったが、目の前にムチを持った恵理子が現れた瞬間、すぐに過酷な要求を受けるしかないと感じていた。

「そうよ、やるしかないのよ。逆らえないわよね」

震える右手を押さえながら、一指し指をゆっくり挿入していった。

「あ・・いや、自分の手で」

無常にもシャッターが押されるが、裕子に抵抗する余裕はない。

「利香、恵美。お手伝いしてあげて」

「は～い」

「な、なによ。お手伝いって。あ、ウ、ウソ。そんな、ヤダ。嫌、嫌よ～」

二人の指が裕子の膣に襲い掛かった。

「い、いやよ。お願い、抜いて」

二本の指が無理矢理、侵入してしまった。いきなりの性器への挿入に激しい抵抗をしたが、膣に入った指が微妙な動きをし裕子の体から自由を奪っていた。

「おとなしくして、カメラに視線を向けて。いいわね。言うこと聞かないと指をもっと奥まで入れるわよ」

写真を撮り終えた静香が、利香と恵美の猥褻行為に興奮していた。そして膣から指を出した二人の女は、

付着した分泌液を眺め、ﾜｻﾞﾄ本人の目の前に持っていき、裕子の表情を楽しんでいた。

「どう、悔しいでしょう。同じ女にこんな事されて」

「あら、そんなことないわよね。これぐらいで、いままでの過ちを償えるだから。儲けものよ。そうでしょう」

「こ、これぐらいって・・・、ここまでしといて。そんな・・」

恵理子の発言に、怒りとこれからの自分に降りかかる復讐に不安を感じていた。

「静香、どんどん進めましょう」

「そうね。じゃあパンティーをまたはいて、立ってちょうだい」

「・・・まだ、まだやるの。今度はなにを。お願いだから恥ずかしいことは」

頭の中にさまざまな葛藤が生まれていた。

「そのまま後ろを向いて」

「う、後ろ。なぜ・・・」

「早く。」

仕方なく後ろを向いた裕子だった。同時に自分の背中に女達の視線を感じていた。

「さっき陰毛を見せたみたいに、今度はお尻の割れ目を見せて。」

「・・・・ま、まさか。今度はお尻を。そんな事」

「さっさとしなさいよ。」

強い口調に、最悪の事態を思い浮かべながら、パンティーを横にずらしていた。

「わぁ～、なんかすごくヤラシイわね。」

「じゃあ、次は・・・・」

「お、お願いよ。これだけで、お尻の割れ目を見せるだけで・・・それ以上は

ま、まさか・・・嫌。そんな事」

第７話

「いいお尻ね。これで男達にも散々誘惑してきたんでしょう」

恵理子がムチを触りながら喋っていた。

「それじゃ、左右の肉付きのいいお尻をそれぞれの手で掴んで。お尻の割れ目に全部の指を入れるような感じよ」

利香の発言したポーズは、これから尻の割れ目を自分の両手で割開くような姿だった。

「も、もういいでしょう。もうやめて、お願い」

裕子はこれ以上、尻に関する要求を避けたいと思い、必死に女達に頼み込んだが、それが逆効果につながってしまった。

「どうしたの、なに脅えてるの。そんなにお尻が恥ずかしいの。ふ～ん、フフフ、そうと分かれば余計に悪戯しないとね」

「よ～し、スミからスミまでじっくり見てやるわ」

「・・そんな、余計な事を言わなければ」

発言に後悔した裕子だったが、それは関係なく尻を見せた時から女達の目標は、その二つに分かれた割れ目の中心の奥底にある部分だった。

「恵理子、隅々まで見るってお尻のどこを見るの」

すべてを知っていて質問する恵美だった。同時に背を向けている裕子の体も反応し、小刻みに震えていた。

彼女達の次の狙いを薄々感じていたためだ。

そんな裕子を無視した甲高い声が飛び込んできた。

「決まってるじゃない。あと見るところっていったら・・・そのまま、お尻の割れ目を左右に開きなさい。おもいっきりよ。ほらはやく！」

女達の最悪の要求に激しい恐怖を感じ、ただ震えるしかなかった。

「聞こえたでしょう。いい？全開よ。これからみんなで、あなたの汚い肛門見てあげるわよ」

全員の大声で笑う声が響いた。その中で裕子は硬直した体で必死に耐えるしかなかった。

「・・そんな。お尻の穴なんて。で、出来るはずないわ・・・」

「ほら、早く。お尻の穴のシワが数えられる位、開くのよ」

「なんか楽しみね～。こんな光景ってアダルトビデオじゃないと見れないわよ」

「あら、アダルトだと肛門にもモザイクがかかるのよ。でも今からは他人の生の肛門が見れるわよ」

耳を塞ぎたくなるような声だった。

「さあ、どうしたの。早くしなさいよ。静香がカメラ構えているんだからね」

「・・・・ぃ、いや・・・」

耐えて我慢する事など不可能だった。

「あれ、いま嫌、って言わなかった。私の聞き間違いかしら」

「聞き間違いに決まってるわ。なんてたって、あんな写真があるんだからねそうでしょう裕子さん。知り合

いに見られずに済むんだったら素直に肛門見せたほうがいいわよね？それとも配っちゃいましょうか？」

追い討ちをかける言葉に、頬に涙が流れた。しかし、この状況を切り抜けられる方法ないと実感し、少しずつ尻肉を開いていった。

「そうよ。でももっとよ、まだまだ開きなさい」

顔面が赤面しつつも、抵抗は出来なかった。

「あ、見えた。見えた」

「案外、綺麗じゃん。シワが多いわね」

「いい、私達が止めていいって言うまでその状態よ。勝手に自分で止めたら許さないからね。今開いている汚い肛門に、指を根元まで突っ込んで中でかき回すからね」

「・・な、なんて事を言うの。でもこの人達なら本当にやりかねないわ」

もはや、無駄な抵抗はぜず、女達が早く飽きてくれる事に期待するしかなかった。

「静香、写真よ。もう脅しの為じゃないわね。あとから笑いのネタにしてみんなで楽しいお喋りでもしましょう」

恵理子が裕子の尻の前に腰を落として座り、肛門を観察していた。

「ねえ、ここでも私達の男とイヤラシイ事したの？」

「し、してないわ。そんな変態行為。」

「変態行為だって、よくゆうわね」

「ヒ・・・なにを」

裕子が掴んでいる尻肉を、恵理子がその上からさらに開いた。そして、肛門に鼻を密着させ、臭いを嗅ぎ出した。

「ちょっと〜、ものすごく臭いわよ。あんたちゃんと洗ってんの。ウンコが付いてるんじゃない？」

「そんな臭いまで、どこまでやれば・・・」

羞恥心でいまにも泣き崩れそうな裕子に、言葉の責めが続く。

「ほんと臭いわね。ひょっとして便秘かしら。今日はウンコしたの。それとも最近してないの」

「・・・・・・」

「聞いてんのよ。答えなさい」

「・・朝したわよ・・」

実際は2日前だったが、その会話を早く変えたかった為のウソだった。

「本当、ふしだらな生活してるあんたがそんなに健康かしら。まあいいわ、その変もあとから調べるから」

言葉の真意を理解する余裕はなかった。早くこの現状を終わらせる事を考えていた。

「ねえ、私がお尻開いているから肛門に人差し指を当ててみてよ」

「う、ぐ・・・やるしかないね」

一指し指を肛門に近づけて、触ろうとしたが恵理子の恥ずかしい指摘がきた。

「もっと気張って肛門を開きなさい。ウンコする時みたいにね。いい、きちんと穴の中心を触るのよ」

周囲の女は恵理子に任せて、この猥褻な雰囲気を楽しんでいた。直接、自分達がやるよりは、恵理子の

残酷な行為や発言を聞く方が面白かったからである。

「やだ～、本当に触ってる。汚い～。なにが変態じゃないよ」

「そんな、自分で、自分で・・言っといて・・・」

「静香、写真よ。ほら顔をこっちに向けて」

「惨めすぎるわ。こんな・・、早くなんとかしてこの場を抜け出さないと何をされるか。もう限界だわ。これ以上は耐えられない。だ、誰か助けて・・・」

裕子は、金銭で交渉し許しを求めようと考えていたが、無駄な行為どころか余計に怒りをかうとは、今は想像出来なかった。

「裕子さん、また連絡するわ。逃げようなんて考えないでね。そんなことしたらこのビデオや写真を市場に売り出すからね」

「・・あ、ああああ・・・・」

泣き出す裕子を無視して、今日の復讐で満足した女達は部屋を出て行った。

4人の同性にさんざんな陵辱を受けた裕子は、しばらくして泣き止み、ティッシュで肛門を拭きながら、これからの未来に不安を感じずにはいられなかった。